

NBKロシア極東産業視察参加報告

2010年度 海外視察研修旅行を実施した。行き先はウラジオストク、ハバロフスクで、9月26日から10月1日までの6日間、総勢12名が参加した。

2010年9月26日（日）の午前9時に大阪伊丹空港に集合し、羽田空港から成田空港に移りウラジオストク航空に搭乗午後8時（日本時間午後6時）にウラジオストク空港に着陸、ロシア極東の地に入った。集合時刻から到着時刻の間で、随分長い時間が経過しているように見えるが、実際の成田ーウラジオストクのフライト時間は2時間であった。地理的に極めて近い隣国であることを示すと共に、交通のアクセスの多様性がないので、既存の細いルートを利用するしかなく、残念ながら時間をかけないと辿り着けない遠い隣国であることを示している。尚、ロシア極東と日本との時差は2時間。

ウラジオストク空港に到着したのは午後8時少し前で、標準時の設定の仕方が変則なために、現地では薄暮の状態であり、原生林と言ってよい雑木林を切り開いて出来あがった空港であることが良くわかった。空港から市内までは60キロであったが、(1)車の数がとても多く、その90%以上が日本の中古車であったこと、(2)ウラジオストクには高速道路がないとのことであったが、新たな大型の高架道路の建設があちこちで進められていたこと、(3)市内に近づくにつれて、交通渋滞がひどくなり、結局60キロをカバーするのに2時間ほどかかり、市内のレストランで食事を開始した時刻は午後10時になっていた。道路インフラが極めて未整備なこと及び整備すべく新たな試みが行われていることを感じた。

ウラジオストクでの最初の訪問先はウラジオストク日本センター（日本国外務省の指導の下日露貿易投資推進や日本語講座など、人材育成を行う組織）で、山本所長（元蝶理の商社マン）のレクチャーを受けた。ロシア極東は人口が少なく、工業生

産高も極めて少ない、その割に物価が高く、要するに経済活動が極めて不活発な地域であるが、メドベージェフ・プーチン政権の意向で2012年度のアジア太平洋経済協力会議（APEC）をウラジオストクで行うことが決定され、開催に合わせて大規模なインフラ整備が行われているとのことであった。

昨夜の高架道路建設やとんでもない交通渋滞など、到着時に見た現象と良く符号するものであり、ロシアの政権側が極東ロシアの開発を、APEC開催を利用して、ウラジオストクを中心に、税金を使って国家プロジェクトの形で、インフラ投資を行おうとしていることが重要な動きであると感じた。

ちなみにロシア極東での主要開発プロジェクト「2013年までの極東ザバイカル社会経済発展連邦特別プログラム」の総投資額は3,000億ドル（約25兆円）に達するとの見通しがイシャエフ ロシア極東連邦管区大統領全権代表によって示されたという記事が2010年4月24日づけ日本経済新聞に出ていた。このうちウラジオストク関係では、APEC会場であるルースキー島に通じる二つの海峡をまたぐ橋の建設、複数のホテル建設、発電設備、発電網の整備、上下水道、廃棄物処理施設の整備、医療センターの建設、会議場の建設、オペラ・バレエ劇場の建設、極東国立大学のルースキー島への移設などに重点投資される予定とのこと。

次に訪問したのは大型トラックと建設機械中心の機械商社「SUMOTORI」社で、年商2億ルーブル（約6億円）とのこと。最新鋭のオフィスビルで活動するウラジオストクのニュービジネスの旗手が社長を務めている会社であった。日野自動車、スズキ、KOBELCOなど日本の自動車・機械メーカーのディーラーをすると同時



に、韓国や中国とも取引があるとのこと。但し80%の商いは日本関連であり、日本の高い品質こそが重要と力説する親日家であった。ちなみに社名の「SUMOTORI」は日本語の「相撲取り」から取ったものであり、「SUMOTORI」という単語の中に「MOTOR」という単語が含まれていることもあって、名づけたとのことであった。

輸入販売など、商社業務が中心とみたので、「工業生産に興味はないのか？」と訊いてみたが、「難しいと思っている。新たな分野はスポーツ、レジャーなどの分野が有望。」との答えが返ってきた。ニュービジネスの黎明期の実際の成功者が、このように思っていることは重要であると感じた。

ウラジオストク商工会議所を訪問し、現状を聞いた。「会員数は200名。インフラが不足している、人口が少ないので工業化は難しいと思っている。主要産業は林業と水産業。観光開発が重要となると思っている。外国との主要取引は中国、韓国、北朝鮮、の順でその次が日本。古野電気さんの医療機器と航海機器に興味がある。日本関係では水産物の生産と加工（養殖を含む）、更には外食レストランなどの設置など、垂直型で日本料理に進出を期待している。」とのことであった。

ロシア日本加工センターを訪問した。極東技術大学の協力の下、設立された日ロの合併事業とのことだっ

たが、実態はソ連が瓦解した際に日本のODAで木材加工の新鋭機械（当時の）を無償貸与し、木材加工の技術進展を期したもの。現在は機械も老朽化したようで、新たな機械が欲しそうだった。ODAとしての貢献実績はあるかもしれないが、ニュービジネス的には殆ど意義を感じなかった訪問先であった。

日本総領事館訪問は午後7時からということになり、総領事公邸にての夕食会という形で行われた。山田総領事含め領事館員の皆さんから歓待を受け、ウラジオストク事情について活発な意見交換が行われた。

シベリア鉄道の夜行列車にてウラジオストクからハバロフスクに移動したが、旧共産時代に作られたシベリア鉄道の寝台車は実用一点張りの狭く、味気ないもので、豪華？であるべき大陸横断鉄道のイメージとはかなり異なっていた。ロシアのインフラ整備の遅れをここでも実感することとなった。

ハバロフスクではハバロフスク日本センターを訪問し、黒坂所長からレクチャーを受けた。黒坂氏は元東京銀行外国為替部門のご出身。ロシア極東の有望地域について鳥瞰図的な見方からお話があった。黒坂所長によれば、将来の有望地域は、バイカル湖の畔にあるイルクーツクであるとのこと。世界の最深湖で世界全体の淡水量の6分の1を占めることなど、今後枯渇する水資源の確保という面、或いはハバロフスク・イルクーツク・ウランウデといったロシア諸都市とモンゴルの首都ウランバートルなどとの連繋が重要となるとのことがあった。石油、ガス、金融などが有望とのこと。

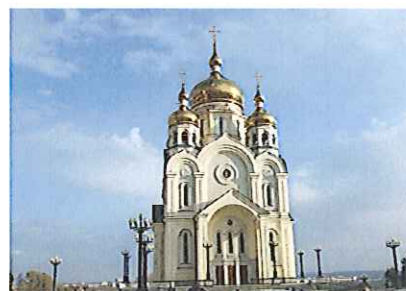
次に訪問したSTROI AKTIV社は「日本製の外壁（ファサード）」に特化した専門商社で、価格の高い日本製の外壁（トステム社など）にも富裕層を中心に需要があることを実感した。ハバロフスクで、ニュービジネス起業に成功した人物がウラジオ

ストクのSUMOTORI社と同じく、日本製品を扱うことで成功したことに共通点を感じた次第。

NEWAUTO社は、花、野菜、果物の輸入商社であり、韓国と日本から輸入している。販売先はスーパーなど小規模の小売店で、日本からは、もも、すいか、メロンなどを新潟のエージェント経由で仕入れている。新潟、秋田、青森などが生産地で、空輸することで新鮮度をキープしている。価格の高い日本製フルーツを空輸してでも買い支える富裕層（60万人の人口のうち2-8%ぐらいと言っていたので、商品によって1万人から5万人ぐらいの顧客が買い支えているものと思われる）が存在することに驚く。いずれにせよ、小口の商いで、NBKの会員企業が簡単に扱えるものではないが、特筆すべきはここでも「日本製品は高品質」ということが認知されていることであろう。

最後に訪問した企業が「バルチカ」という国産ビールの巨大工場であった。デンマークのビールメーカーと提携し、世界標準の規格、品質にてビールの製造を行っており、国内には競争相手がいないとの説明があった。ロシア国内で10箇所以上の工場が設置されているうちのひとつで、極東ロシアについては、ハバロフスクで生産を行っているとのこと。

デンマークのメーカーとの契約形態について質問してみたが、現場の案内者のレベルでは答えようがないようで、はっきりとした説明はなかった。但し、ロシア政府の都合で接収などが出来ないように契約締結が行われているような印象を持った。技術的には、ドイツのホップや麦芽を使って、しかも西歐的な製造方法を取っているのが、世界標準のもの作りを出来る範囲ぎりぎりまで技術移転したように思われる。これでは真の意味でロシアの製造業が強くなってきているわけではないが、こういった形で国内産業の雄が誕生していることに、大きな興味を感じた。プーチン首相は日産自動車のゴーン社長との会談で日産とルノーにロシ



ア極東で自動車を生産するよう要請したとのことであるが、ビールのバルチカと同じような方式で雇用創造、税収確保などを計画しているのではなかろうか？という印象を持った。

冒頭でも述べたように、目にする自動車の9割は日本車の中古車であり、このまま手をこまねいていると、ロシア全体が日本車の中古車だらけになるという危機感があるように思われる。ウラジオストクのホテルで30代から40代の日本人グループ4人組が食事をしているのに隣り合わせた。車のメンテナンスを担当しているらしく、活発にクライアントを回っているようで、しかも同一の会社から来ているようには思えなかった。日本の中古車の販売は、相当浸透していることが伺えた。

以上がロシア極東での訪問先についてのレポートとなる。極東地区は人口が少なく、大消費地としては期待できず、輸出は望み薄であり、従来の林業、水産業の輸入のほうも飛躍的な拡大はあり得ない。寧ろ手付かずの大自然を利用した観光開発などにチャンスがあるだろうと感じている。「週末はロシアで手付かずの大自然の中で過ごそう！」といったキャンペーンなどが、わかりやすく一番手っ取り早い進出かな？と感じるが、それとて、観光インフラの整備に巨額の資金と時間が必要となる。

広い国土と、豊富な水資源、エネルギー資源、何より日本に最も近い隣国の一つといったロシア極東の長所を活かしながら、現実的な着手はどうあるべきか、ということを色々考えさせられたのが今回の産業視察旅行であった。

（常務理事 松原繁生）